



継続は力なり

技能五輪「電工の部」には昭和40年代後半から参加し始めた当社は、研鑽のかいあって、50年代当初からメダリストを多く輩出するまでに技能レベルも向上し、社内には技術・技能に秀でた設備会社としての自負も高まり士気は大いに向上しました。とりわけ全国大会「電工の部」で活躍したA氏は世界大会（スペイン）で行われた技能五輪で金メダルを獲得することができ、会社の市民権向上に大きく向上したのです。彼は今会社の中で「困ったときはA氏」へと良きアドバイザーとして慕われ活躍され、若手からなお絶対的な信頼を受ける切り札的存在となっております。

これを契機に内線工事部門（強電・弱電）の受注は増え、さらなる技能・技術の進歩が図られ、会社の大きな飛躍のきっかけとなりました。

世界各地での仕事も多くなり、微力ながら国際協力も進めてきました。そのようななか、当社は突然技能五輪の舞台から撤退するに至り、状態は15年続きました。これは時代の移り変わりが、背景にあったと考えられます。採用は自ずと大学卒が中心となり、現場管理技術者を早期に育成することが各部門戦略の要になりました。

高卒者を採用し、時間や手間をかけて一人前の技術者を育てる余裕をなくしたわけです。

必然的に21歳を上限とする技能五輪への参加資格を失いました。別の面からも次々に歪みが生じました。技術者採用そのものを大きく手控え約10年間で各部門の技能・技術の継承を拒んでいたのです。会社内で現在働き盛りといえる30代後半から40代前半の技術者が極端に少ないため現場技術者の絶対数が不足してしまい、入社して間もない20歳代の技術者をOJTで鍛えるべき指導者が、すべての面で現場

仕事に従事しなければならない状態となりました。

平成11年、会社は再び若手の採用育成にも力を入れ、五輪参加へ動き出したのです。参加はしたけれども、全選手が作品を完成することができず、惨敗でした。

「継続は力なり」入賞することを一定の目標とするなら、計画的・継続的な採用がいかに重要か。企業運営そして「営利企業」としての本来の成果を問われる立場を、顧みることができます。今考えると、10年間の空白は、五輪不参加の反省すべき点ではなかったかと思います。

「ものづくり」と「人材育成」という、わが国の持つ貴重な無形財産を保持・継承していくことが、今国内の多方面で叫ばれています。

急激に力を付けてきた近隣諸国等に対して優劣を競う技術に対抗するためには、国を挙げてのレベルの向上は一層大切です。

今当社もその考えを踏襲定着させるべき、中長期の人材育成策を立てて邁進しています。

中断した施策を再び呼び戻し、実効を上げるべき努力とエネルギーを持って、また指導者育成に力を注ぎ過去のブランクを取り除く努力中です。

技能・技術の向上を目指す指針づくり、会社の将来を担う若手を育てる方策を会社全体で取り組まなければ発展は望めません。

かん みつお
略歴 昭和44年 東北大学文学部卒
(株)ユアテック入社
平成4年 経営企画部課長
平成13年 人材開発センター所長